

Fujian's culture at MinDuBieJi

ZHANG Tao

Abstract

Fujian is located on the southeast coast of China, where the water has been very developed since the ancient times and the god of gods flourish. With the novel *MinDuBieJi* at the center of the interpretation, analyzing from Fujian's marine culture gene, Fujian's culture radiation influence and history. combing Fujian ocean cultural value. this article intends to take Fujian regional culture as the keyword to clarify the plot of the novel *MinDuBieJi*. in order to explore the new view of Fujian.

『閩都別記』から見る福建の地域文化

張 韜

はじめに

明清時代において福建の地域文化を代表する小説と言えば、『閩都別記』は必ずその一つに数え上げられると思われる。『閩都別記』は、『閩都佳話』、『閩都別記雙峰夢』とも呼ばれ、作者は「何求」と自称しているが、その身分は目下のところ不明である。『閩都別記』は編年体で書かれ、黄巢の乱（唐・僖宗乾符二年、紀元 875 年）から清の康熙二十二年（1683 年）まで、その年数は八百年を超え、時代の隔たりが大きいこともあって、その内容が極めて繁雑である。全四百一回、百二十万字を超えるということを含め、そのような形式では中国古典小説史の中でユニークな小説とも言える。

『閩都別記』は福建の歴史に題材を取り、福建地元の伝説、民間故事を史実に加え、福建の地域文化に根ざした長編章回小説である。その文学性は「四大奇書」をはじめとする中国古典小説には及ばず、『中國古代小説總目提要』に「然全書過於龐雜，結構凌亂，以小説藝術角度目之，并無足稱」（全体はあまりにも煩雑で、構成もでたらめである。小説を芸術作品という角度から見れば称賛に値しない。）と評した¹⁾。『閩都別記』に対する一般的意識は今日までもほとんど変わっていない。

1) 朱一玄、寧稼雨、陳桂聲『中國古代小説總目提要』人民文學出版社、2005 年

では、福建の歴史を題材とする小説としての『閩都別記』の新奇性はどこにあるのか。それは『閩都別記』の序文にある「雖屬稗官，未始非吾閩考獻之卮助。博奕猶賢，不可廢也。」（稗官に属するとはいえ、我が郷土閩の歴史を調べる材料にならないわけではない。博奕も猶賢たり、廃すべきではない。）という文によって示されている。確かに、稗官に属すると言われるように、この小説の最たる特色として注目を集める福建地域文化との結びつきに関する部分は、多くが史実に基づくとは言え今日の日から見れば虚構である。但し作品に導入された正史以外の様々の民間故事や地元の伝説において、福建の歴史と地域文化とが融合されていることこそ『閩都別記』の最も著しい特徴である。

小説の創作は作者に置かれた社会と切り離せない関係にある。明清時代となり、商品経済の発展につれて、中国の小説の読者はインテリから庶民の一部にまで広がり、それにつれて、小説は庶民生活を反映することによって飛躍的な発展を遂げたと考えられる。また、明清時代の白話小説は、常に地域文化と強く結びついていることも、小説の読者の広がりとは結びついていると考えてよいだろう。明末を代表する短編小説集「三言」には、民間の風習が描かれた場面が多く、例えば『警世通言』『樂小舍拼生覓偶』の冒頭には錢塘江における「觀潮」という地域風俗に関わる描写がある。そこでは、「觀潮」という文化的事象は背景としてプロットを動かせる重要な機能も果たしていると同時に、読者は描写を通して、当時の杭州の風貌と庶民の生き方を垣間見ることができる。

近年、小説を資料として地域文化を研究することが盛んになってきた。中国の東南部に位置し、独自の歴史と文化を有する福建が『閩都別記』の舞台となり、すでに述べたように、『閩都別記』が福建の歴史や伝説を反映していること、福州の街並み、貿易の繁栄、民間信仰などが描かれていることから、小説を通じて福建の地方文化を分析するうえで、極めて重要

な資料たりうると思われる。従って、本稿では、福建地域文化の研究に基づき、小説としての低い評価の陰に隠れた『閩都別記』のもう一つの側面を炙り出すことを目的とするものである。

『閩都別記』は福州の地方文化と密接な繋がりがあり、福州地方文化の百科事典とでも言えるほど、反映された地方文化は豊富である。『閩都別記』の前半部では主に五代時期の福州を舞台にしているが、五代時期を託して明清時代における庶民の生活が生き生きと描写されている。また、福州の方言、民間故事、神話及び諺が大量に引用されている。作品の後半では、福州の南台地域の商業活動、海外貿易活動などの描写により、福州の庶民の生活が忠実に反映されている。さらに、陳靖姑の物語も完全な形で引用され、陳靖姑の信仰研究にとって極めて貴重な資料を提供する文学テキストである。なお、福州出身の筆者にとって馴染みの深い、「半辺魚」、「吉庇巷」、「牛磯」、「羅隱」、「鄭唐」などの伝統民間故事も相当数引用されており、この作品と福建のとりわけ福州の地域文化との密接な関係を窺うことができる。

歴史小説のような形式をとる『閩都別記』であるため、福建省（台湾を含む）の歴史に詳しい記述があるが、その内容は虚実入り混じっている。『閩都別記』は福州或いは福建地方文化の研究にとって得難い文学テキストであるが、個人創作ではないため²⁾、テキストに統一性がなく、乱れているところも少なくないと思われる。一方、そのためか、『閩都別記』は各部分の独立性が強く、それぞれの部分を切り離せば、短編小説ともなり得るとも言える。

『閩都別記』の内容全体はほぼ福建と密接な関係があると考えられる。先に挙げた陳靖姑の伝説についてであるが、陳靖姑は「臨水夫人」と呼ば

2) 董執誼『閩都別記・序』福建人民出版社、2016年。『書中章回修短不一，自二百四十一回後若別出一手』

れ、福州の一番重要な民間信仰の対象とされ、福州では水の女神だけではなく、婦人と児童の守り神でもある。現在、福州の子供たちを七歳の時に陳靖姑の養子に迎え入れてもらう風習が残されている。陳靖姑と夫である劉杞蓮の物語は第二十一回「洛陽造橋觀音顯應 鬢髮化臨水降生」から第八十七回「痘哥洒逗救直諫士 神公借神誣老元臣」まで陳靖姑の生誕から逝去にかけてのことが詳しく記述されている。『閩都別記』の中に極めて重要な物語であり、テーマでもある同時に、道教閩山派と陳靖姑信仰研究にとって貴重な資料と見なされている。

例えば、陳靖姑を祀る時に、お礼の供え物として鶏、豚、牛、羊を捧げるが、ただ鴨だけは供え物にさせないというタブーを有する習俗があるが、『閩都別記』にその習俗の言われについて、第八十二回「陳夫人祈雨捉蛇首 長坑鬼抱恨害婦胎」に福建に旱魃が激しく、妊娠中の陳靖姑が民衆の為に雨を乞ったが、敵である巨蛇に襲われた。

夫人祈降甘霖已夠足，忽腹中胎毀血崩，不勝疼痛，洋坪將沉。看見蛇首在水底拖墜，夫人知被暗算，奈神散體軟，聽之拖墜，忽天上降鴨三個，銜洋坪席浮起，夫人已墜在水複浮。因洗清淨，複整精神。

夫人は雨を乞って、恵みの雨が十分に降った。突然に腹の胎児が毀傷され、血が激しく流れ出て、痛みに堪えなく、間もなく漂っている敷物が水中に没するようになる。蛇首が水中に敷物を引っ張っていることを目に入り、陰謀を企まれたことは夫人が知った。失神で、無力な状態に陥い、引っ張ったままにさせる。急に天から鴨三羽が降り、敷物を銜え上げていた。水に没した夫人が再び浮かび上がる。不潔をすすいだために、活気が漲った。

興味深いのは、この物語に呼応して今現在、陳靖姑の妖怪退治が行われ

たと言われているところは、今だに「鴨母洲」と呼ばれている。つまり、これらは『閩都別記』が民間信仰、風俗習慣などを含む福州の市民の生活状況と結びついていることを示すことが分かる。

一、海洋に基づく福建文化

福建は中国東南沿岸に位置し、山と海に囲まれた地域であるということが、その文化の特長の基本となっている。第一に、南方に位置し南部は亜熱帯に属する福建では台風も含め降水量が多く、稲作が古くから行われ、稲作文化に属するということが挙げられる。第二に、山が迫っているため、広い耕作地を確保することが容易ではなく、古代から海に依拠した生活が広く行われてきたため、海洋文化に属することが挙げられる。それは具体的に言えば、漁労文化であり、先にも述べた造船や貿易を産業の中核とする文化でもあった。

長い歴史の中で、中央集権国家による支配の時代が長かった中国においては、各地域と政治の中心地との関係が極めて重要であった。しかし福建の地理的環境では、他地域との陸上の交通は極めて不便であり、特に福建人が政治の中心地を目指して陸路で北上する場合は、二つの険しい道を選ばざるを得ない。一つは江西省鉛山河口鎮を経ていく道あり、もう一つは福建省と浙江省の境である仙霞関を越え、浙江省江山県に辿り着く道である。しかし、いずれも険しい道であり、黄河の流域を中心とする中原と交流をするためには不便極まりなかった。従って、福建が中国の中央集権的王朝の中にある限り、もう一つの道、すなわち海上の道によって北方と結びつくことを余儀なくされたことが、福建の海洋文化のもう一つの重要な要素である。

三千キロメートル余りある海岸線に百二十五ある大小の島々という地

形³⁾、それに山が迫り平地が少ないという農耕に相性が悪い自然環境はむしろ海洋経済に合致していた。しかも、福州の馬尾、莆田の湄洲、廈門、泉州を代表とする天然の良港があるため、海洋を利用する貿易、漁業、造船業、塩業が盛んとなった。特に北宋に市舶司が泉州に設置され、南宋以降は福建の泉州を起点とする海のシルクロードによる貿易が繁栄し、市舶司による貿易だけでなく、私人貿易も盛んで、海洋を基盤とする産業が福建経済の重心になっていた。

福建の歴史的な転換点は、海禁政策が実施された明清時代である。元朝は貿易を重視し、泉州は対外貿易の重要な港となり、福建沿海部も大きく発展が遂げたが、明朝の半ばから、市舶貿易は衰えたのに対し、漳州の月港をはじめとする私人貿易が繁盛するようになった。『安海志』には「私貨海上之商人，或奔逐蕃舶泊踞之海港以販私利；或勾結官吏，假給文引，自擁海船；或勾結武裝，縱橫海上與夷人爭利。」（私人貿易の商人は、蕃舶が寄港する所へ疾駆して商い、私利を獲た。或いは官吏と気脈を通じ、文書を手に入れ、自ら海船を収めた。また、武装と共謀で海上に縦横して、夷人と利益を争っていた）⁴⁾と述べたように「片板不許下海，艚艚巨艦反蔽江而來；寸貨不許入番，子女玉帛恒滿載而去。」⁵⁾という光景が常に見られるようになった。その背景には鄭芝龍鄭成功父子に代表される海賊と疑われるような集団も生まれていた。

巨大な利益を得るために、福建人は海禁政策を冒し、海を通じて全国に活躍していた。李光緒が「安平市（泉州）賈行遍郡國，北賈燕，南賈粵，西賈巴蜀，或冲風突浪，爭利於海島漁夷之墟。」⁶⁾（泉州の商人は全国の各地を走破して、北に燕、南に越、西に巴蜀に至り商売する。或いは海を渡

3) 『福建風物志』福建人民出版社，1985年。

4) 『中國地方誌集成・安海志』「卷十三・商賈」上海書店，1992年。

5) 明・謝傑『虔臺倭纂』知識産權出版社，2011年。

6) 明・何喬遠『閩書』「卷三八・風俗」福建人民出版社，1994年。

り、島の市場に売り買いしている。)と述べ、全国で利益を求める福建商人の姿が見られるという指摘がある。

明清時代において福建の海上貿易が発達し、中国の各省だけではなく、東南アジア諸国、日本、琉球の各地域とも密接な貿易関係が出来上がった。「凡外夷貢者，我朝皆設市舶司以領之。在廣東者專為占城、暹羅諸番而設，在福建者專為琉球而設，在浙江者專為日本而設，其來也，許帶方物，官設牙行与民貿易」⁷⁾ (凡そ外夷が朝貢する者であり、我が朝は全て市舶司を設え、管した。広東では、占城、シャムなどの蕃国に、福建では、専ら琉球国に、浙江省では、日本に向けて設置された。官辺が牙行を設え、彼らを携えて来た特産品を庶民と取引する)と述べたように、福建の進貢場柔遠駅は琉球から船舶・人間・品物を管理する機構である。

梅木哲人氏「福州柔遠駅と琉球・中国関係」より、「明代には朝貢・冊封関係が形成され、中国、東アジア、東南アジア諸国諸地域が、中国を中心として結ばれることで、一つの新しい世界を形成した」⁸⁾と指摘した。十六世紀となり、海禁政策より漳州月港の二十四將反乱は琉球との密接な貿易関係が何のより証明であるとも言及した⁹⁾。柔遠駅の設立より、福建と琉球の貿易ネットワークが成り立ったことである。但し、明王朝の衰えと伴って、公的な貿易活動が低下となった。一方、柔遠駅の先頭を切る機能を果たし、民間の私人貿易が大きく発展を遂げたと考えられる。

清となり、三蕃の乱を定め、台湾も回復した後に、康熙帝は鄭氏の開放的な政策を踏襲し、「故大開四省海禁，特設關差定稅。」¹⁰⁾ (四省の海禁が解かれ、海関を設え、税を定めた)とされ、海禁政策を廃止したのである。

7) 明・鄭若增『籌海圖編』「卷十二」中華書局、2007年。

8) 梅木哲人『中国福建省・琉球列島交渉史の研究』『福州柔遠駅と琉球・中国関係』第一書房、1994年。

9) 前掲『福州柔遠駅と琉球・中国関係』

10) 清・施琅『皇朝經世文編卷』「八十三兵政十四海防上 海疆底定疏」中華書局、1992年。

また、「如今販洋貿易船隻，絡繹而發，只數繁多」¹¹⁾（今現在海外へ貿易に出航する船が跡を絶たなく、数量がおびただしかった）と言われたのである。

その大背景で海洋という記号が福建或いは福建人に刻み、「閩人以海為田」（閩人は海を以て田を成す）の生き方が生まれた。福建人が海洋に密接に繋がり、貿易と伴い、福建経済の向上させ、海外との交流も頻繁になってきたことが明らかである。それが異色な福建の地域文化が生まれた一つ要因である。

海により生計を維持するため、異色の福建地域文化が成り立ったと言えることができる。17世紀にロシアより中国へ派遣された公使 N, Spataru Milescu の『中国漫記』¹²⁾ に福建は次のように記録されている。

本省靠海，商業繁榮，商船成群。這裏也有高山，山上有參天大樹，中國人用它造船和其他各種用品。（中略）這個省的物資特別豐富，因為這裏是商業的集散地，全中國唯有這個省具有這種習慣和做法：居民離別故土，遠涉重洋去別國經商。（中略）這裏有許多海盜，中國人把他們叫做“邪惡的人”。

本省は海沿いに置かれた。商業が繁榮して、商船が群れを成す。ここにも山があり、山で空高くそびえる大木がある。中国人はそれを使って、船と各種船用品を作った。商業の集散地のために、福建省は物資がごく豊富だ。中国ではここにだけその習慣がある。即ち、人々が故郷を離れて、海外へ赴いて商売している。（中略）ここに海賊が沢山いる、中国人は悪人と呼ばれている。

11) 前掲「海疆底定疏」

12) N, Spataru Milescu 著，蔣本良、柳鳳運譯『中國漫記』中華書局，1980年。

「安土重遷」（住み慣れた土地は離れがたい）という中国伝統な觀念に対し、福建人はその意識が薄く、海外へ進出し、利益を得ることを重視した。このように海と結びついた福建文化は、黄河流域を中心とする北方の農耕文化との間に文化・風俗の著しい相違が生まれた。「疏通海禁疏」¹³⁾に「東南濱海之地、以販海為生、其來已久、而閩為甚。閩之福興泉漳、襟山帶海。田不足耕作市舶無以助衣食、其民恬波濤而輕生死。」「東南濱海之地、海に販するを以て生と為す。其の來たるや已に久しく、而して閩は甚だしと為す。閩の福州、興化、泉州、漳州は山を襟にし、海を帶にす。田は耕作に足らず市舶以て衣食を助くる無し。其の民海濤に恬として生死を輕んず。」とある。顧炎武『天下郡國利病書』もまた同様に「閩地斥鹵磽確、田不供食、以海為生、以洋舶為家者、十而九也。」¹⁴⁾「閩地は斥鹵にして磽確（アルカリ土壤で瘦せた土地を指す）、田食を供せず、海を以て生と為し、洋舶を以て家と為す者は十にして九なり。」と述べている。

こうした海に依拠した生活の中から、福建独自の価値観も生じた。『閩都別記』第二三八回到鉄麻姑の台詞にある「万里を遠しと為さず、三年を遅しと算せず、総じて乾坤内に在れば、何ぞすべからく別離を談ずべき。」という言葉は、海を通じて東アジアの各地に出かけていった福建人の価値観を表すものである。18世紀となり、福州、泉州、厦門、漳州は商売人が集まる町になり、福建は中国で都市化率最も高い地域の一つと見なされ¹⁵⁾、全国からの商品と商人が集められ、消費都市に変わった。海上貿易と伴い、経済の繁盛につれて、また市民生活は豊かになり、文化の発展も多様化していた。

周知の如く、漢民族は典型的な農耕民族と見なされる。しかし、特色あ

13) 明・陳子龍『明經世文編』『卷之四百・許孚遠疏通海禁疏』中華書局、1997年

14) 清・顧炎武『天下郡國利病書』「福建三・洋税」上海古籍出版社2012年

15) Susan Naquin 著、陳仲丹訳『十八世紀中國社會』「第五章地區社會 東南沿海」江蘇人民出版社、2008年。

る地理環境によって異色の福建地域文化が生み出された。福建は南方にあって伝統的な稲作文化を保持しながら、一方で海洋文化が発達した結果、稲作文化と海洋文化が混合され、異色の福建文化が生まれた。

『閩都別記』が地域文化と密接に結びついていることは已に述べたが、『閩都別記』が基づいた福建文化は中国にあっては異色の海洋文化という特質を持っていた。このことは、『閩都別記』に重要な影響を及ぼすこととして、着目しておかねばならない。

二、『閩都別記』の構造

『閩都別記』の入話は周朴の物語である。周朴は歴史上の実在の人物とされている。『新唐書』に周朴に関する記述が残されているが¹⁶⁾、独立の伝記ではなく、『逆臣』に副次的人物として記録される。『閩都別記』には周朴に関する記述が史書の記述より豊富であると思われる。周朴は隠者であり、詩を詠じながら、福州を漫遊していた。黄巢の反乱軍がすぐに来襲するという噂が流れた。福州の住民は何処かに逃げて隠れようとしたが、周朴は隠れるつもりがなく、黄巢が来たら、面と向かって黄巢を激しく叱責しようとしていた。しかし、息子周啓文のため、やむを得ず一旦隠れることにすると決め、息子を連れて安全な場所にたどり着いた。途中服が濡れたという口実を設けて、家族と別れ、家に戻って黄巢を待っていた。息子は不安になり、父親探しに戻ったが、途中で黄巢の軍に出くわして捕まってしまった。一方、官僚の娘である呉青娘は、逃亡しようとする人混みに巻き込まれ、どこへ向かえばよいかが分からなくなっていた。しかも纏足のために、歩みづらくて難儀をしていたが、思いがけず「榴花洞」という洞窟を見つけたので、その中に入り、休憩しながら、家族を待ってい

16) 宋・歐陽修、宋祁『新唐書・列伝第一百五十下・逆臣下』中華書局、2003年。

た時に、黄巢の軍が福州城へ行く隙を見て、榴花洞の外側で捕まっていた周啓文を救った。一方、周朴は降伏することを拒否し、黄巢により殺された。その時、噴き出したのが赤い血ではなく白い血であったため、黄巢は驚愕し、敢えて福州に駐屯せず、翌日北上した。そのために、福州の人々は塗炭の苦しみに陥ることを免れたのである。後になって、周啓文は閩王王審知に命を受け、新たな都城（羅城）を造るということになった。

周朴の物語は『閩都別記』の中で、極めて重要な機能を果たしている。『閩都別記』の前半240回は周朴の息子である周啓文と周朴の孫である周艷氷とその親族を軸とし、周朴の一族の物語とも言える。第一回「周太樸幻入雙峰夢 僧懶安預知三世縁」というタイトル通り、周朴の夢すなわち「蘭桂拗折，分貯三布袋，又去打別花。忽有三女子騎羊突出，搶去三袋之蘭桂各懷抱羊背上，由海上面奔馳而去。」（自らが蘭と桂を折りにとって、三つの布袋に入れると、別の花を折りに行った。突然三人の女性が羊に乗って突進し、三つの袋の蘭桂を奪い取り懷に抱くと、海面を疾駆して去った。）という夢が叙述される。この夢によって、前半二百四十回を中心となる物語内容が示され、歴史に翻弄される周一族三世代の波乱万丈な生涯が語られていくのである。

この前半部分を含めて、『閩都別記』の内容は三部分に分けることができる。前半は第一回「周太樸幻入雙峰夢 僧懶安預知三世縁」から第二四〇回「萬國圖贈尋親歸舍 雙峰夢覺度脊登仙」までを『閩都別記』の第一部分と考える。これは物語内容からだけでなく、第二四一回冒頭のところには「前文結双峰夢全篇。現在烏石山中，有雙峰合拱，上勒“雙峰夢”三字。」（前文より双峯夢の全編が終わり、現在烏石山である二つ石に取り囲まれ、「双峯夢」という三文字が彫られた）という記述があるため、一応二四〇回で物語が完結していると編者が考えていたことが分かるからである。

第二部分は従って、二四一回「雲程随妻歸扶順國 麻姑格物取化雞蟲」から第四〇〇回「建吉屋許氏大團圓 現精氣歸結雙峰夢」までとなる。しかしながら、第二百四十一回からの物語は前半のような明確なストーリーがなく、独立性の強い物語が年代別に並べられているにすぎないため、スタイルでいえば長編小説の後半ではなく、短編小説集に類似する。

さらに、第三部分については、「序」により元々全書は四〇〇回であった。丁卯年の重版の際に、福建の副貢林光天、字水如が収集していた白話の詩を散逸させるのを惜しみ、かつそれらの詩が本文中に引用されている詩とスタイルが似ているため、第四〇一回に「榕城白話詩」の回を設けそれらを収めた。言わば付録である¹⁷⁾。

第二部分も例外なく、重大な歴史事件を除き、ほぼ物語は福建地域と関係ある物語である。その結びつきを名示するために、まずは『閩都別記』第二部分の物語を挙げる。

前二百四十回の内容は、ほぼ周朴一族と陳靖姑の物語であり、全て福建と強い結びついたことが明らかである。さらに、『閩都別記』の第二部分の内容も一目瞭然、李自成などの重大歴史事件を除き、例外なく福建を舞台とする物語であり、即ち「閩人閩事」を記録する物語であり、長い年月を隔てた今の福州の人々にも親近感を持たれている物語が並ぶ。このことから、『閩都別記』が福建という地域の文化を反映した作品であることが見てとれる。第三〇一回「嚴軍令戚參將斬子 滅倭寇張經略遭刑」は典型の一例である。

戚繼光は倭寇を追い払うために、福州の北部に駐留した。倭寇が福州の北臨に至った時、戚繼光は息子である戚印に先鋒を命じていた。出兵する

17) 裏人何求『閩都別記・序』福建人民出版社、2016年。「林光天、字水如。道光間副貢、喜為白話詩文、傳抄頗多、訪其家亦無完帙。以與是書體相近、且惜其日久失傳、爰就所見附錄於後、庸有未盡收也。」

主要人物	回数	物語内容
白姫	261-265	福州の民間故事
劉鶴齡	266-271	福建民間信仰である青蛙神
鄭和下西洋	272-275	出発点—泉州
鄭唐	283-293	閩劇「鄭唐傳」、『福州民間故事集成』収録
戚繼光	301	『福州民間故事集成』収録
于謙	279	明初の名臣
嚴嵩	299-308	明嘉靖の奸臣
葉向高	312-314	福州人、萬曆天啓内閣首輔。『福州民間故事集成』収録
鄭芝龍	315-317	福建に立身
曹學佺	320-324	明末の藏書家、閩劇の先鞭。『福州民間故事集成』収録
鄭成功	343-346	台湾関わり
施郎鄭克爽	348-349	平定台湾関わり
南明弘光朝廷	343	南明の都—福州
張獻忠	340-341	明末乱軍の指導者
李自成	327-320	闖王、明末乱軍の指導者
耿精忠	369-373	靖南王王府所在—福州
葉青選	353-368	内閣首輔葉向高の孫、閩劇「蛇娘恋郎」
車克旺	374-380	福州民間故事「姐妹嫁」
海壇総兵許紫雲	380-400	福州の平潭市民話

前に、全軍に「直往破賊，回顧者斬」（ひたすら賊を破るため進め、後ろを振り向いたものは斬罪に処す。）という命令を下した。城門の外側に至り、戚印は、父親が追いついたかどうかを確認しようとして、振り向いてしまった。戚繼光はそれに気づき、戚印を捕らえ、処刑しようとする。しかし、兵士たちは情に訴えて許しを請っていたが、戚繼光は自分の命令の筋を通すため、敢えて息子を処刑した。このことが兵士たちを発奮させ、勝利を収めた。大軍が凱旋して帰還する際に、息子が処刑された場所を通

ったため、戚継光は思わず落涙してしまった。そこでここに亭を建造し、「思児亭」と名づけられたのであった。

戚継光は倭寇と闘った明の名将と知られている。福建においては鄭成功と並び最も有名な民族英雄であり、戚継光を巡る民間故事が福建省に極めて多く、その「戚継光斬子」は戚継光と関わる代表的な民間故事の一つである。『中国民間故事集成・福建卷・福州分巻』¹⁸⁾においてもこの物語が収録された。

三、『閩都別記』の物語内容とその特色

『閩都別記』の内容について、従来の評判が高くないと思われる、若しもっと鋭く眼を凝らして現実を見れば、この説には性急な判断が含まれていることが言えよう。

『閩都別記』がその特徴を有する福建地域文化の中に育まれたことであり、福建の地域文化は『閩都別記』に莫大な影響を与えたことが間違いないと考えられる。作者は白話を用いて分かりやすい表現を通して、当時福建の諸事情を記述している。小説の内容が様々な地方史、民間信仰、地方風習と切り離せないということである。

以下、『閩都別記』が福建の歴史と密接に繋がっている作品であることを示す例いくつか挙げる。

『閩都別記』の前半部分の時代背景はほぼ五代十国時期である。従って、筆者は『閩都別記』の内容が清『十國春秋』と照らし合わせよう。『十國春秋』は五代十国の君主の事蹟を、清初に見られた各種の雑史、野史、地志、筆記等の文獻資料から采録している。これは、歐陽脩の手になる『新

18) 主編張傳興『中国民間故事集成・福建卷・福州分巻』福州市民間文學集成委員會、1990年。
P.39

五代史』に遺漏が見られることによるものである。五代十國の研究には重要な文献であり、それが参照に成れる原因と考えられる。

先是，黃巢將竊有福州，時建州刺史李乾佑棄城走，後守李彥聖戰死。建寧人陳岩聚眾千餘人，號九龍軍，率眾拔之，福建觀察使鄭鑑奏為團練副史¹⁹⁾。（『十國春秋』）

初め、黄巢が間もなく襲来するという噂が流れた。建州刺史である李乾佑は城を棄て、逃げ去った。後継者である李彦聖が戦死した。建寧人の陳岩は千人余りを招集して、九龍軍に編成し、兵士を率いて町を攻略した。福建觀察史である鄭鑑は団練副史である。

『閩都別記』では元刺史李乾佑と後に任命された鄭鑑が混同されている。

再說福州刺史鄭鑑懦弱無能，賊兵臨境先已遁去，賊退方回。自覺慚愧，不敢戀棧。聞建州陳岩前在本州招集千餘人，操練武藝，號為九龍軍，保護本州。至巢兵過，各山寇乘機搶劫，而建州安堵如故。鄭鑑表奏朝廷，以陳岩可為福州觀察，自願退任。（『閩都別記』第七回「龍泉一拜英雄皆服 學校初開文獻大興」）

さて福州刺史鄭鑑は無能で、賊軍が近づく前に遁走した。賊軍が離れてから戻ってきた。深く恥じ入り、さすがに自分の手柄とは思わなかった。建州に陳岩が千人余りを招集し、武芸を訓練し、今九龍軍と呼ばれ現地を守っていることを耳にした。黄巢の賊軍が通過するのを機に、各地の山賊は強奪していたが、ただ建州だけが平穩無事だった。そこで、鄭鑑は朝廷に対して、才能ある陳岩が福州觀察史に任命する許しと自らの退任を願うべく上奏した。

19) 清・吳仁臣『十國春秋』「卷九十閩一」中華書局，1993年。p 1299

『十國春秋』と『閩都別記』の比較を続ける。まず『十國春秋』では

初以糧少，故兼道馳，約軍士曰：以老孺從者斬。潮與二弟時奉母行，緒切責潮，欲斬其母，潮等請先母死，會諸將士皆為請，遂舍之²⁰⁾。

初めに食糧が少ないため、行軍を急がねばならず、兵士に「老人や子供がついてきたらこれを斬る。」と命令を下した。王潮と弟が母親を連れて行軍したため、王緒はこれを責め、その母親を殺そうとする。王潮は母親が処刑される前に自分たちに死を与えられることを願った。兵士たちは皆寛大の許しを乞うたため、王緒はそれを断念した。

『閩都別記』の第七回「龍泉一拜英雄皆服 學校初開文獻大興」では

至漳州，以道險糧少，令軍中無以老弱隨，犯者即斬。惟王潮兄弟扶其母以從。王緒知之責曰：“軍皆有法，未有無法之軍。汝違吾令而不知，是無法也。”王潮等曰：“人各有母，未有無母之人。將軍奈何使人棄其母乎？”王怒，命斬其母。潮曰：“將軍殺母，焉用其子？請先母死。”王緒不從，眾將為之請保，亦不從。

漳州に至って、道が険しく食糧も少ないので、王緒は全軍に老人子供を連れていくな、もし犯す者がいれば斬る、と命令した。ただ王潮兄弟だけが母親を連れて行こうとした。王緒はそれを知って咎めて曰く、「軍には全て法があり、法なしの軍隊などはない。お前らは命令に無視するのは無法である。」王潮兄弟は「人には必ず母がおるもので、母のいない人はおらず。にもかかわらず、將軍は部下にその母を捨てさせようとしている。」と答えた。王緒は激怒し、彼らの母親を斬る命令を下した。王潮は「何故、將軍は我が母を殺しておいて、その子である我々を使うことなどできはしない。母の前に我々に死を与えよ。」と答えた。王潮は「將軍は僕たちの母親を殺したら、どうし

20) 前掲『十國春秋』「卷九十・閩一」p 1298

て息子の手用いて殺すか？ 母親の先に殺されるのを望んでいる。」
と言ったが、王緒は拒んだ。将兵がみな寛大を乞うても拒んだ。

『閩都別記』では、最後の部分が史実と異なり、王緒は自らの「忠義」を表すために、何度も兵士たちの願いを拒否した。さらにその後の部分で、王潮の弟王審知の愛馬を狙って強要し、これと引き換えに王潮王審知兄弟一行を釈放した。王緒という人間は人の命より馬が大事だと思っていることが分かり、兵士たちの怒りを買った。この結果部下が上に逆らい、王審知勢力の崛起の原因となったという物語は、史実を踏襲した上でさらに加工したものであることが考えられる。

無論、歴史と一致する物語も見られる。閩国恵宗（926年—935年）である王璘が酒色に溺れ、奸臣の帰守明を寵愛していた。

恵宗晩年得風疾，後遂與幸臣歸守明私，百工院使李可殷少與守明狎，因守明以通與後，出入殿內。恵宗常命錦工造鏤金五彩九龍帳於長春宮，既成進之，守明日宿於內。國人歌曰：“誰謂九龍帳，惟貯一歸郎²¹⁾。”（『十國春秋』）

恵宗は晩年に半身不随となり、そのため皇后は寵臣の帰守明と不義密通をしていた。また、百工院使である李可殷は若い頃から守明と不倫な関係を持っている。守明は皇后と密通していたために、後宮に自由に出入りすることが可能になる。嘗て恵宗は錦工に長春宮に鏤金五彩九龍帳を造ることを命じた。作り上げて献上した後に、帰守明が良くその帳の中に宿していた。国人は「誰が謂うたか九龍の帳 惟貯える一歸の郎」と歌っていた。

21) 前掲『十國春秋』「卷九十四 閩五 列傳」p 1361

閩王璘見帳奇美，因問：“何來？”陳後曰：“臣妾之表弟、百工院使李可殷貢進”閩王大悅，加封可殷內院使。自此可殷亦出入無忌矣。其龍帳惟歸郎常寢，不伴閩王便伴陳後，中外皆知。國人歌曰：“誰知九龍帳，惟貯一龜郎。”未幾，金鳳又與李可殷私通。（第九十七回「完宿願賽仙訴三恨 因微嫌春燕食六親」）

閩王は著しく美しい帳を見て、何処から届いたのかと聞いた。皇后の陳氏は「私の従兄弟、百工院史の李可殷が献上したものでございます。」と答えた。閩王は大喜び、内院使に昇進させた。これから、後宮に自由に出入りすることができるようになった。その龍帳は歸守明が専ら用いていたので、守明は閩王に仕えず皇后に仕えるということも宮中も民間も知っていた。国人は「誰が謂うたか九龍の帳 惟貯える一歸の郎」と歌った。程なく、金鳳と李可殷が密通し始めた。

興味深いのは、作者は「帰」を同音の「亀」に替えて、中國においては亀は侮蔑表現の一つとされ、愚かな者、恥知らずの意味として用いられる。それが作者の意図を見据えることができるのではないか。『閩都別記』には閩国の朝廷に関わる物語が少なくない。作者は概ね歴史を踏まえて書いたことは確かであるが、史実に手を入れた部分と考証が欠けた所も見られる。董氏の「其書合于正史及別史載記者各十之三，野説居其四焉。」（正史と別史に合致する所は三割で、野説に当たる所が四割を占める）という論断が適当であると思われる。

また、董氏の「序」では「以福州方言叙閩中佚事，且多引里諺俗腔，複詳於名勝古跡。」（福州方言で閩の逸事を叙し、諺と俗語が多く引かれ、更に名所旧跡にも詳しかった。）と述べたように『閩都別記』には福州と関わる民間故事も常に引用されている。およそ福建の人々に親しい物語である。以下はその一つ例である。福州には祭酒岭という地名がある。「祭酒」

の語源は三国時期に曹操より設置された官職と普通に考えられる。地方志には「祭酒岭」についての記述には詳しく残されている。

『閩都記』

祭酒岭、在清泉山之西。閩時有光州湛温者，事王延翰為禦史大夫，國子祭酒。建州刺史王延稟使者至閩，延翰命温往餞，且酖之。温恐延稟兄弟從茲多釁，遂自飲鴆以死，閩人哀之，葬於此地，遂名其山²²⁾。

祭酒岭は清泉山の西にある。閩国の時期に光州出身の湛温という者がいた。御史大夫、国子祭酒として建州刺史である王延稟に仕えていた。王延稟は使者を閩国に派遣したが、延翰は湛温に別れの宴に乗じてその使者を毒殺することを命じた。湛温は兄弟が垣根の中で争うことが起こらないように毒を飲んで自殺した。閩人は心から嘆き悲しんで、その地に埋葬し、この山に湛温に因む名を付けた。

『閩都別記』にも地名の由来が詳しく記述される。

卻說閩王無道，采遍福州民女，猶頒詔令泉、建二州刺史選進。泉州刺史王延鈞乃延翰之胞弟，不奉詔命。建州刺史王延稟乃先王養子、延翰之兄。性猛烈，怒甚，遣使齎書至，書中多是兄責弟之語，王延翰閱之大怒，將殺其使者，命國子祭酒湛温往西郊餞送之，用藥酒欲酖之。湛祭酒奉命，先至西郊高岸嶺候之，自思：“若酖殺其使者，建與閩結釁；若不酖之，難以復命；自酖之，庶免兄弟結釁。”遂自酖死于高安岭上。（第五十八回「手足自殘閩王通道 姐弟進寵歸郎避妖」）

さて、閩王は悪行ばかりで、福州の平民の女子を召し上げ、更には泉州と建州の刺史に女を献上しろと命じた。泉州刺史の王延鈞は延翰の実弟であるが、命令に従わなかった。建州刺史の王延稟は先王の養

22) 明・王應山『閩都記』「卷十九湖西侯官勝跡」海風出版社，2001年。

子で、延翰の兄だった。彼は乱暴な性格であったため、延鈞の態度に怒り使者を差遣した。手紙の中にはほほ兄として弟を責める言葉ばかりで、兄の延翰は激怒し使者を殺すことにした。国子祭酒湛温に命じ西郊で別れの宴を開き、毒酒で毒殺しろと命じた。湛温は拝命し、先に西郊の高嶺で待ちながら考えた。もし使者を毒殺したら、建州と閩は仇敵となる。もししなければ、復命できない。ここは自殺することで、兄弟げんかを防ごう。」そして、高安嶺に毒酒を飲んで死んでしまった。

既に述べたように『閩都別記』の記述と『閩都記』の記述はおよそ一致していると考えられるが、但し、完全に同じではなく、『閩都別記』の物語のプロットは史実より一層豊富である。『閩都別記』民間故事類型考析²³⁾によれば、祭酒嶺をはじめとする地名に関する記述が全書には五十箇所若がある。ここから、作者が各地方志の記録を引用したうえに、意図的に加工していること、またどのように加工しているかを明らかにすることができる。

なお、『閩都別記』の中に福建の先住民と考えられる「疍民」とその生活状態も詳細に描写されている。「疍民」の船が閩江沿いに寄り集まり、それは福州の一つ特徴の風景とも言えるが、同時に彼らへの対応は近代の政府にとって深刻な問題であった。そして、今に至るも生活の貧困、就職や子供の入学をはじめとする「疍民」への差別問題も完全に解決されていない。

昔から彼らは船で暮らし、漁業、運輸業、売春で口を糊していた。そのために足が変形し、男性は曲蹄、女性は曲蹄婆とも呼ばれている。服飾や

23) 楊式熔、王枝忠「『閩都別記』民間故事類型考析」福州大學學報（哲學社會科學版）、2007年4期。

生活習慣なども漢民族と異なる面があり、下等人と差別され、そのために、「疍民」という特殊な群れは人に嘲笑される対象であった

清『閩縣鄉土志・版籍略一・人類』²⁴⁾では「疍民」について次のように述べている。

縣有一種之人，以舟為居，能久伏深淵。俗呼曲蹄，以處舟中，其腳常彎曲不舒故。或作乞黎，賤視，如漸惰民，不齒齊民，不通婚媾。蓋口蜚戶也。江幹海滫，隨處有之，雖浮家泛宅，無一定之所，而分港澳，姓多翁、鷗、池、浦、江、海。諸氏間有登岸結廬者，然亦不習工商，仍供賤役。

県には船で暮らし、水に潜ることが優れている人がいる。俗に「曲蹄」と呼ばれ、長い間船で暮らしているため、足が曲がり、伸ばせないのがその原因だ。乞食をすることもあり、正業につかない人として差別され、一般人と異なり、婚姻も行われない。彼らは、大河や海沿いの至る所で見られる。船を家としているが、定住する所がなく、広東や香港にも居住する。苗字は翁、鷗、池、浦、江、海が多い。ある者は陸に上り家を造ったが、職人や商人となることもできず、賤業につくよりなかった。

こうした認識のもと、『閩都別記』の中にも差別的な言葉を用いて「疍民」の生活習慣が描写されることが多い。彼らは小利を貪り、真面目な仕事に就かず、人生をうかうかと無為に過ごしたとされる。君子と見なされる主要人物である周啓文も以下のように述べている。

指船婆之頭曰：“此不是定風珠耶？”吳義一見船婆之頭，大笑不止，

24) 清・朱景行、鄭祖庚『閩縣鄉土志』海風出版，2001年。

蓋乃船婆乃光光之頭如和尚，一莖頭髮亦無，惟光溜溜就像珠一般，暴見之如何不笑。

船婆を指して「それが定風珠ではないか。」と言った。呉義は船婆の頭を見て、笑いが止まらなくなった。なんと船婆の頭に髪の毛がなく、まるで和尚のようである。一本の頭髮もない有様はつつるに磨かれた珠玉のようだ。突然これを見たら、笑わない訳がないだろう。

ここから、庶民がさらにひどく差別していたことが想像できる。清の筆記である『竹間十日話』²⁵⁾の中で、ある秀才が曲蹄と結婚し、社会地位が激しく落ちていく例も見られる。

金鏡字肅明，作秀才貧甚，與賣漁人通譜。福州所稱賣漁嫂即曲蹄婆，以其生長船中，兩足俱曲故名。沒為賤種，子孫不得應試。例不登岸，作半片髻，以別田婆；有梳髻帶中簪者，田婆輒毆之。近三十年始湮矣。州邊田中灣裏所稱曲蹄婆乃妓女，托為賣魚嫂，故涉訟。則穿紈袴稱漁婆²⁶⁾。

金鏡、字肅明、秀才であるが、随分貧しく、売漁人と結婚した。福州では売漁嫂は曲蹄婆で、長時間に船に暮らして、足が曲がった。それより名付けられた。下等人に見なされ、子孫が科挙にも入試できなかった。恒例より陸に上げなく、半片の髻を通じて、陸上の婦人と区別する。ある髻に簪に挿す者がいれば、陸上の婦人が殴る。近三十年に尾羽打ち枯らして、福州の周り、田圃と港に曲蹄婆と呼ばれているのは実は売春婦であった。売漁嫂の名に乗じたのために、裁判に及んでいる。また、華麗な服装を着るのは漁婆と呼ばれていることである。

25) 清・郭柏蒼『竹間十日話』海風出版社、2001年。

26) 前掲『竹間十日話』「卷五」

『閩都別記』第十九回「素女廟題詩和妯娌 烏龍江被浪難救災」では、周啓文は曲蹄の船に乗り、津波に襲われた。周啓文は溺れている人を見つけ救おうとした。ところが、曲蹄の夫婦は既に恐怖のあまり人を救うことを拒否し、「這個光景，少一個來救我們，焉能救得別人？」（その状況では俺らを救う人もいないし、他の人を救うのは有り得ない）と言った。周が救おうとして竹竿を伸ばしたところ、曲蹄が竹竿を奪い取った。救われた人は呉義と言い、曲蹄婆を指して罵り、「好个曲蹄瘟，你不救我也罷，周老爺救我，汝還咕哩咕哩，是何道理。（貴様、お前が僕を救わなくていいし、どうして旦那様は僕を救おうとしよう、お前がまた愚痴をこぼした。）」と詰問した。「小人不知是吳相公，若知，亦拼命救起。其實不知，勿怪。」（私めは溺れた人が呉さんだと知らなかった。もし知ったら、命をかけても救い出すんだ。本当に知らなかった。咎めないで下さい）と許しを乞うた。呉義は「便非我，就不該救么」（僕ではないと、救わないの？）「都想出來救，卻被老遭瘟說，无人來救我們，我們那里救得別人」（救いたいが、あの死にぞこないめが「俺らを救う人もなくて、他の人を救うのは有り得ない」と言われた）と答えた。そして、呉義は「我今有人救了就是好，我也不怪你，罰你把我二人趕緊擲到臺江船上去，將功折罪。不然我把你的船拉上岸放火燒去，連兩人也一起燒死。（僕が救われても済んだ。お前に責めるつもりがない。手柄で罪を償って、さっさと僕たちを台江の船まで送ろ。しないと、お前らと船を陸に引っ張って燃やせ）」と罵った。

なお、第七十一回「人幻荊棘好色自 鬼船人皮變曲蹄婆」では、化け物が曲蹄婆に化け、さらには駆け落ち女に扮して柳田家に暫く泊まる。ある日夜、柳田は曲蹄婆が風呂に入っているところをついつい覗いてしまった。

薄情不學好，一去再不到，且待他以來，拿他取頭腦。言訖，身上紗衣脫下，露出白雪肌膚，落湯盆洗了一會，又剝去皮殼，便變出綠面獠

牙、赤發猙獰惡鬼形狀。又洗了一會，拭幹，將老嫗皮殼先穿上，那惡鬼便化為老嫗；又穿一重皮殼，便是美女形狀，如往親愛佳人。

「あの釣れない奴、あちに行って今夜も戻らない。今回彼が着いたら、首を割って脳みそを取る」と言ってから、紗衣を脱ぎ、真っ白い肌が現れた。浴槽に入り、ちょっと間に洗って、また皮を剥がして、凶悪な形相が現れ、牙を向き出し、紅髪に悪鬼の面貌にする。もうちょっと洗って、体を拭き取り、老女の皮を身につけた。あの化け物が老女となり、また一重の皮を着、普段の形のような美女となっていた。

『聊齋志異・畫皮』に類似の場面もあり²⁷⁾、作者はこの物語を通じ、当時福州の「晝民」が化け物と扱い、劣等な人間と考え方が浮かび上がると窺いできる。清嘉慶時代の筆記『問俗錄』にも曲蹄の生活が記録され、曲蹄が売春と繋がっていることが記述されている。

古田男女有別，街廟院絕少遊女。惟水口蕩船，來自南臺洪山橋一帶，名曲蹄婆。服以綾綢，飾以絨花，頭橫長簪，面傅脂粉。紅鞋赤腳鄙蓮步；柳腰為纖巧而不為。月琴在禦，彈不成聲，歌不成調。一燈如豆，鴉片在床，俾晝作夜。驛站諸人如蜂如蝶，出入花叢而不寤。是誰知錢歟？且大憲行旌，杳無確信，省城探差、家丁、雲集驛舍。凡遇水口公幹，召子員，而子朱爭往，厥後極樂世界一項經費，出自古田令焉。方思嚴禁，而瓜期遽及，不果。亦風流因緣之無可解脫於人間歟？²⁸⁾

古田では男女がけじめがある。町に売春婦が極めて少なかった。ただ水口に南台洪山橋の辺りから来た船に曲蹄婆と呼ばれた。絹織物を

27) 清・蒲松齡『聊齋志異』『畫皮』中華書局，2015年。「則室門亦閉。蹣跡而窗窺之，見一瘠鬼，面翠色，齒如鋸。鋪人皮於榻上，執彩筆而繪之；已而擲筆，拳皮，如振衣狀，披於身，遂化為女子。睹此狀，大懼，獸伏而出。」

28) 清・陳盛韶『問俗錄』『曲蹄婆』書目文獻出版社，1983年。p 72

身に着け、毛糸の花を飾り、長簪を髪に横に挿し、白粉や口紅を用いて化粧した。紅靴を履き、又は裸足のままで纏足を賤しめる。繊細な腰をさせなかった。月琴を御したが、弾くのが苦手で、音程もずれていた。光が豆ように弱く、アヘンは寝台に置かれ、朝晩が翻させた。宿駅の人々がわんさと押しかけ、蝶々が花々の間を楽しそうに舞っているように寝ようとしなく、お金はどのようなものを知る人がいなかった。官員が出行する時に知らせがないために、省城の役人、家来は宿駅に雲集した。凡そ水口に公務がある場合、手先を集めた。手先が遅れまいと先を争っていた。何故なら、公務を遂げる後娯楽の費用が古田令から出した訳である。禁止させようとするが、任期を間もなく満了し、結局実施しなかった。それとも風流のゆかりを解消する所がないだろう。

第一一〇回「客愛才代買身存艷 先贈識咎尋見僧」の中にその現象も言及された。男装している林慶雲は都から亡命し、やむなく一時に曲蹄の船に身を寄せていた。しかし、曲蹄である夏七は売春を斡旋する人である。

卻說林慶雲投在夏七船中安身作漁家之子。船回馬江，船幫之人見之，皆曰：“看不出夏七有此搖錢樹，快來與我們賀喜食酒。”慶雲雖不懼，聞此等語乃悟，此船乃勾引風流之處所。

さて林慶雲はといえば、暫く夏七の船に曲蹄の子として身を寄せていた。船が馬江に戻ると、船団の人が見て、「夏七にそういう金の成る木があると思ひもよらなかった。早く俺らに酒を買って来いよ。」と言った。慶雲は恐れることはなかったが、それを聞いたら、この船が男どもを相手の水商売をする場所が分かった。

男装している林慶雲を安く価格で売ろうとしよう。幸いなことに、林慶雲が突然の異変にも慌てず対策を考え出した。従って、船が福州商業の中心台江にたどり着き、客を招た。二人の乗客が台江区に積み荷を降ろしている。小休のところに乗客は慶雲が見つかり、曲蹄の息子と思われ、慶雲に仕えさせようとする。慶雲が断り、扉を閉めた。乗客が激怒し、吐ったことである。「二客曰：“看不出曲蹄有兒子，快叫出來陪我們食酒。”慶雲將艙門關閉，二客見閉門不出，便罵曰：“不識抬拳的東西！凡漁家子女，不待呼喚，該來接客才是，今叫反關門耶？”」（二人の客は「曲蹄はそのような息子がいることが信じられなく、早く酒席のお供をしろ」と言い出した。しかし、慶雲は扉を閉めて、避けようとする。客は目に入って、「人の好意を無にする野郎、漁家の子なら、呼ばないでさっさと来るべきだ、かえって扉を閉める訳がないだろう。）」そのような「疍民」生活の生活状態がそこかしこにも反映されている。

当時、「疍民」の生活状態について、その一端から全体を窺うことができると考えられる。

いずにせよ、『閩都別記』は閩人閩事を記載する小説であり、その物語には、福建の地方文化。『閩都別記』は正史ではないものの、小説研究のみならず福建の地方文化、民俗研究にとして一種有効的な補充と考えられる。

四、福建の海洋文化に生み出した『閩都別記』

福建地域では人々の暮らし、ひいては其の文化が海洋と緊密な関係にあったことから、『閩都別記』はその作品を生み出した現実的な基盤、即ち福建の海洋文化、及びこれと不可分の関係にある。福建省が海上貿易の発達により、商売が栄え、福建商人が各地に活躍していた。地域文化や社会

の基本的な生活が反映された『閩都別記』には福建商人の描写も決して少なくない。いま、『閩都別記』からそうした海で生きた福建商人に関する記述をいくつか挙げておこう。

蓋呉光乃建州豪族、遷於南臺。有母顔氏，妻孟氏，子六個。長子名鴻經，五子鴻謀，同父管押十只洋船往來。一年至交趾、日本、呂宋等國，一年至天津、山東、淮揚各處。次子鴻濟、三子鴻韜、四子鴻略，在淮安坐莊，料理十六間行務。（第二十回「啓文得交信報無到 青娘愛夫卦佔有靈」）

そもそも呉光は建州の豪族で、福州の南台に移った。母親は顔氏、妻は孟氏、六人の息子がいる。長男鴻經、五男鴻謀が父親とともに十数隻の洋船を管理している。ある年は交趾、日本、呂宋へ、また、天津、山東、淮揚などへ行き商売している。次男鴻濟、三男鴻韜は淮安に十六種の仲介役を営んでいる。

至呉光同小康回及諸人出洋遇著，一同駛至日本倭國。呉光之子鴻經、鴻濟、鴻韜、鴻略、鴻猷共掌十只洋船在蘇州，素常來往倭國貿易。其林秀參同子天鶚，早在該國坐莊接貨。天鶚長成軒昂，被日本國丞相招為女婿，秀參十分榮耀。（第一二五回「呉周尋親反陷倭國 神僧攝孩留在閩君」）

呉光と小康回の一行と洋上で落ち合って、一緒に日本すなわち倭国へ向かった。呉光の息子たち、鴻經、鴻韜、鴻略、鴻猷は共同で十隻の洋船を有し、よく倭国へ貿易のため往来している。また、林秀參と天鶚はその国で輸入業をしている。天鶚は立派な男となって、日本の丞相の娘婿として招かれて、秀參もごく光栄だった。

なお、当時福建人の海外への進出とともに、海外の異邦と福建の交流が促され、海外に関する見聞が豊かになった。『閩都別記』にもそうした内容が多く、海外と福建との関わりが描かれる回数はほぼ全書の十分の一を占める。従って、『閩都別記』にも主人公の眼を通して、海外の風土も具体的に描写される。第一四三回「鐵麻姑為夫聘香女 林仁翰因婿詔倭王」では、鉄麻姑は夫である吳云程を救うために、陳仁翰とともに海外へ就航し、倭国へ赴いた。戻り途中に嵐に遇い、燭陰国、渤泥国、扶余国、扶顛国などの海外諸国を経巡ることになった。これらの中に燭陰国という既に古籍に記載された虚構な異邦がある。一方、渤泥国という様な実在した海外異邦もある。

「渤泥国」は今現在のブルネイ・ダルサラーム国と思われる。『諸蕃志』の「渤泥国」によれば、「渤泥在泉之東南，去闍婆四十五日程，去三佛齊四十日程，去占城與麻逸各三十日程，皆以順風為則。其國以板為城，城中居民萬餘人，所統十四州。」²⁹⁾（渤泥国は泉州の東南にある。追い風の場合には、闍婆まで四十五日間、三佛齊まで四十日間、占城と麻逸まで三十日間かかる。その国は板で城を作り、城の中に万人余りが暮らし、十四州を管轄する。）また渤泥国は長い間に中国と友好的に協力しあっていたことも史書に見える。「凡見唐人至其國，甚有愛敬，有醉者則扶歸家寢宿，以禮待之若故舊。」³⁰⁾（もし中国人がその国に至ったら、国人が敬愛する。酔う人がいれば、国人は家に連れて親友として扱うように面倒を見る）、凡そ中国の船が着港するたびに、政府から民間に至るまで、中国の船員を優遇することがあった。

『閩都別記』第一四五回「男女仙救童斬光棍 夫妻翁帶幼漂渤泥」では、鉄麻姑たちは渤泥国に着き、厚遇されたことが述べられる。

29) 宋・趙汝適『諸蕃志』「渤泥国」中華書局，1996年。

30) 前掲『諸蕃志』「渤泥国」

原來該渤泥在大海中為大國，漂風之船，到彼皆照應供給。地方之有司官來查察，將仁翰等及諸舵工、水手及行李物件帶至公館安頓。

そもそも渤泥国は海の中の大国で、漂流した船がそこに到着すれば、例外なく必要なものを供給する。地方の関係する役人はやって来て調べると、仁翰とその一行を、荷物とともに公館に連れて行き滞在させた。

渤泥国に滞在中、鉄麻姑たちは渤泥国で「胡笳十八拍」を耳にし、探しに行くと、渤泥国に軟禁されている元王様の妾を見つけた。その妾は名前が蔡麗容であり、福州出身であること、王が逝去した後に王子の強要を拒否したために、邸宅に軟禁され、処刑を待っていると伝え、この段の最後では、呉雲程が妾を救い出す。福建人の海外への進出と海外諸国の交流の頻繁さが垣間見えるエピソードである。

東アジアに限らず、アラビアとペルシャも重要な貿易相手と見なされていた。「纏頭赤脚半番商，大舶高檣多海寶」³¹⁾という様な光景は常に見られることであった。福州では1960年代に、福州の閩王王審知の一族である劉華の墓でペルシャの孔雀藍釉瓶が出土した。考証により、その出土品は間違いなくペルシャからの舶来品であろうとされた³²⁾。『閩都記』に見える閩王の墓の盗掘についての記述「國朝宣德四年，為盜所發，得金鐺，玉帶、玻璃碗及王畫像。」（国朝宣德四年、盗掘され、金の腕輪、玉帶、硝子碗及び王の肖像画を得たのである）にある玻璃碗とは、出土したものと同じくペルシャからの輸入品である可能性が高い。

閩王の墓所が盗掘されたことが史実であるが、『閩都別記』にもその事件は記述されている。第五十五回「忠懿薨賜祠嘉陵勵 延翰立建宮殿嬌淫」

31) 明・釋忠勸『全室外集』「卷四」欽定四庫全書本

32) 陳存洗「福州劉華墓出土的孔雀藍釉瓶的來源問題」海交史研究，1985年。

に閩王の墓所が盗掘され、副葬品が奪われたが、取り戻すことができた。取り返してみると、ある碗は異様な光が瞬いている。アラビア商人が硝子製品などを主な商品とする商人であることが良く知られていたため、アラビア商人を呼び招き、弁別させたところガラスの碗であるとした。

中東の商人には常に神秘的な色合いに満ちている。第一〇七回「聯詩句皇叔帶金通 代隱瞞道人被色迷」に「釀王曲部美、押不蘆花鮮」（釀王の酒は美味しく、押不蘆花は鮮やかである）という詩句が見えるが、その「押不蘆花」は中東からの舶来品であり、かつ猛毒の薬であり、宋・周密『癸辛雜識續集・押不蘆』「押不蘆」についての詳細な記録がある³³⁾。閩南地域の伝統劇である歌歌仔戲に『將軍的押不蘆花』という人口に膾炙した戯曲にもその名が見られる。また、泉州にはアラビア、ペルシア、インドとの交流を示す数多くの石刻、石碑が今も残されている³⁴⁾。福州の番鬼巷（今、宦貴巷と呼ばれる）、番船浦、泉州の蕃人巷をはじめとする外国人の居住地が設けられ、外国人の子供向けの藩学も設置された。こうしたことから、福建とアラビア、ペルシャなどの中東地域と貿易によって密接に結びついていたことが分かる。

さらに、貿易相手としては琉球が最も密接な関係を有し、貿易を含む交流も頻繁であった。従って、『閩都別記』にも琉球に関する描写も最も多く、内容も豊富である。

『閩都別記』第二七五回「鄭和釋長樂縣儒士 蔡茁為琉球國世臣」には琉球の地理環境について次のように詳細に述べている。

蓋琉球在大海中，始名琉虬，明永樂中改為琉州。其國在福州正東一千七百里。其地東西廣數十裏，南北長四百四十裏，有三十六島。水程

33) 宋・周密『癸辛雜識續集・押不蘆』中華書局，1997年。

34) 吳文良、吳幼雄『泉州宗教石刻』科學出版社，2005年

南北三千裏，東西六百里，漢晉末通中國。……先是琉球分為三國，中曰中山，南曰山南，北曰山北，屢相爭鬥。洪武十五年，賜詔諭之，而山北亦相繼遣使入貢。二十五年，始遣王子與陪臣子弟入太學，是其入監讀書之始。

さて琉球は海の中にある。元の名は琉虬であり、明永楽年間に琉球に名を改めた。その国は福州の東に千七百里までの所にあり、東から西までの広さが数十里で、南から北までの長さが四百四十里である。三十六個島があり、水陸で中国と通じ、漢晋の末に中国と通じ始めた。(中略)初めは、琉球が三つ国に分かれ、真ん中の国は中山、南のは山南、北のは山北と呼ばれた。屢々に互いに鬭争していた。洪武十五年、勅令を下してから、山北も使者を派遣し、朝貢国となった。二十五年、初めて王子は陪臣の子弟に伴い、大学に入学した。それが国子監に入学の始まりであった。

ここに書かれていることは『明史』の記述と一部分が一致する。

琉球居東南大海中，自古不通中國。元世祖遣官招諭之，不能達。洪武初，其國有三王，曰中山，曰山南，曰山北，皆以尚為姓，而中山最強。五年正月命行人楊載以即位建元詔告其國，其中山王察度遣弟泰期等隨載入朝，貢方物。帝喜，賜《大統曆》及文綺、紗羅有差。……山北王怕尼芝即遣使偕二王使朝貢。十八年又貢，賜山北王鍍金銀印如二王，而賜二王海舟各一。自是，三王屢遣使奉貢，中山王尤數³⁵⁾。

琉球は東南の海にある。古くから中国と通じなかった。元世祖は官吏を派遣し、勅令を下したが、届かなかったことである。洪武初年に、その国は三つの王国があり、中山、山南、山北と呼ばれ、苗字は全て

35) 『明史』「列傳第二百十一・外國四」中華書局，2015 年

尚であつた。その中に中山は最も強かつた。五年五月に楊載に建元の勅命を表明に琉球へ行かせた。その中山王である察度は弟の泰期をはじめとする人に使を命じて、中国へ赴き、土産を朝貢した。帝は喜び、『大統暦』、織物を賜った。(中略) 山北の王である怕尼芝既に二人の王と共に朝貢した。十八年に再び朝貢に赴き、山北王に二人の王が有したような金銀メッキ印を、他の王に各一隻の海船を賜った。これから、三人の王は屢々使を派遣して、朝貢に赴いた。その中に中山王の次数が最も多かつた。

『閩都別記』の記述は『明史』の記録と一致するところがあり、作者は琉球の状況を良く了解していたという推論できる。『閩都別記』の中で、重要な貿易相手国とする琉球に関する記述が極めて詳細であり、琉球と福建の交流が忠実に反映されていると考えられる。それだけでなく、明の洪武年間、福建人は琉球へ海を越えて渡り、那覇の付近に「久米村」という福建人のための居住地を設けたことも描かれている。

前洪武年間、賜琉球國閩人十八姓，至永樂中，又賜閩人十八姓，二次共三十六人為大夫等官。夷官有姓，乃自此始。

洪武年間に、琉球国に暮らしている閩人に十八姓を賜った。永樂年間となり、また閩人に十八姓を賜った。二回の合計で三十六人が大夫などの官僚となった。琉球の官僚はこれ以降姓を有するようになった。

久米村に福建人が住むようになると、その地を唐營、後に唐榮と呼ぶようになった。そこに住む人々は当然のことながら、明の制度としきたりに倣った服装をしていた³⁶⁾。この時の彼らの服装や髪型が琉球の人々に大

36) 琉球・蔡温『球陽記事』巻六「唐榮土臣衣冠容貌悉從國俗。明洪武壬申，敕賜閩人三十六姓，

きな影響を与えた。また、福州方言の俗語には「琉球人戴網巾」³⁷⁾という言葉があり、福建とりわけ福州の人々が琉球について親近感を抱いていたのであろうということも想像に難くない。

なお、貿易交流のみならず、福建の女神信仰が琉球にも伝播して広がり、特に媽祖信仰は琉球でも大いに普及した。それに対し、琉球人が神となって崇拝され、福建地域信仰の一部となることもある。それが蔡紅亨である。

蔡紅亨は琉球王国の三司官の一員蔡温の一族であり、実在の人物と見なされている。明の万暦年間に、明朝に龍袍を朝貢したことがある。上京途中に、福州長楽に没した。そのために、死後、万暦帝は「精巧妙明懿德夫人」という称号を追認し、長楽に廟を建造するという勅旨を下したという記録が残った³⁸⁾。後に福州の長楽の人々は廟に祀られている蔡紅亨を神格化して蔡媽、蔡姑婆、蔡夫人と敬称を奉り、さらに水神として蔡夫人を信仰するようになった。その上に、福建人の貿易ルートを通じて蔡夫人信仰が台湾にも伝わり、台湾中部において盛んに信仰された³⁹⁾。『閩都別記』にも蔡夫人の出身と行いにも記述が概ね神格化として描かれている。

蔡苗傳至十余代，至萬曆年間，耳目大夫蔡金城有一女，名紅亨。年十六歲，不但美蓋通國，還有一段奇異：其睡撲於桌，頃刻魂行千裏。其睡或一時，或須臾即醒，或汗出許久方醒。……蔡金城遣人去查，

以數文教於中山，兼令掌貢典。國王察度深喜悅之，即葡宅於久米村而棲居焉，遂名其地曰唐榮。素稱唐營，今改榮字。故其所服衣冠皆從明朝制法，包網巾、戴方巾、沙帽。」

37) 徐葆光『中山傳信錄』「卷六」齊魯書社，1996年。「前明琉球人，皆不剃髮，惟不明網巾。萬曆中，冊使謝行人傑，閩之長樂人。母舅某從行，攜網巾數百事，至無可售；謝使遲冊封禮久不行，雲本國既服中華冠帶，冊封日如陪臣有一不網巾者，冊事不舉；琉人競市一空。福建至今相譁強市者，則雲「琉球人戴網巾也」

38) 「蔡氏家譜」(志具家)明朝琉球貢內有花布美麗絕倫是乃系蔡夫人之所織也。厥後夫人奉敕進京，至長樂而亡。皇上憐其遠死他鄉，敕使福建布政司建廟於長樂縣。題曰：琉球蔡夫人之廟屢有靈效，地方人敬之至今，每月布政司發賜廟米幾門著為定規，但世久人湮，為族氏某之女為何事進京，其難稽考，然而女人之身冰奉大邦尊敬者，誠系異事故記以垂後世。

39) 黃萍瑛「臺灣民間信仰狐娘的奉祀——一個臺灣社會史的考察」國立中央大學碩士論文，2000年

……於是，家中父母兄信紅亨所說之夢話乃真有是事，始知其日間常睡，魂在海上巡遊，保無風便回；如有風遂與之爭戰，風退始回，所以汗出，誠神人也。（第二七六回「永樂帝遣使封中山 蔡姑婆回閩遇臨水」）

万歴年間には蔡茁の十数世代の子孫に至った。耳目大夫である蔡金城は娘が一人、名は紅亨、十六歳にして國中無双の美しさがある。その上に不思議な力もあった。机の上にうたた寝をすると、魂は既に千里のかなたまで行った。その眠りは一時に及ぶこともあれば須臾に目覚めることもあり、汗をかいてからだいぶ経って目覚めたこともある。（中略）蔡金城は人を派遣して、調査した。（中略）家族皆が紅亨の言った夢の話が真実であること、昼によくうたた寝する時は、魂が海を巡回し風がないことを確認してから戻ってくること、もし風があればこれと戦い、風が退くと戻る。汗が出るのはそのためで、本当に神人だった。

『閩都別記』の中ではさらに、夢で風波を鎮める能力を有する蔡夫人がもっと多くの人間を救おうとし、陳靖姑の門弟となり、「退風」の法術を身に付けたいと告げた。すると夢に陳靖姑が現れ、彼女も蔡紅亨を高く評価するがゆえに、承諾したと蔡紅亨に告げた。一方、万歴帝は宦官に四人の海外女官を探して来いという命令を下した。宦官は蔡紅亨を見つけ、彼女が琉球出身だけではなく、法術も使える美人であることを知り、蔡紅亨に上京するよう強要した。蔡紅亨を乗せた宦官一行の船が福州の長楽の水域に入る時に、蔡紅亨は琉球蔡家の祠を参拝するという口実で船を下りた。その際に暫く宦官の目が離れると、陳靖姑に呼びかけつつ、足を組んで座ったまま死んだ。蔡紅亨の魂は陳靖姑とともに、臨水に戻り、水鎮の法術を習い、以下のように宣した。

自此琉球国之邪魔鬼怪，皆被收除淨盡。海辺遇難者喊救如响。長樂之人如有事，呼琉球国蔡氏姑婆，无不顯應。后肉身被琉球国盜回，此處只存手袖在本族家中。

これより琉球国の妖魔幽鬼の類いはことごとく退治されるであろう。海辺で難に遭ったものは救いを求めれば救われよう。福州長楽県の人にもし何かあれば、琉球国の蔡氏姑婆を呼ぶがいい、必ずや靈驗あらたかである。後に遺体が琉球国によって持ち去られたため、その地には衣服の袖だけが本家の人々に残された。

福建人の子孫である琉球人が、琉球と福州の間をつなぐ貿易ルートの中で、水上の安全と貿易を守る水神となったのである。

終わり

上の論述を通じ、自然環境に山に囲まれ、辺鄙な東南の片隅におかれた、海洋・稲作文化と混合された福建地域文化が生まれた。主な生活手段として海上貿易の繁盛を促し、商業が大きく発展が遂げ、市民生活は豊かりになった。福建の地域文化も海洋に莫大な影響を受けたことが違いない。特殊な地理環境を有する福建は風俗、習慣、信仰などの異色の特徴を生んだことである。稲作文化であろう、海洋文化であろう、農業生産に潤沢な水が必要であり、海洋貿易に水で各地に赴くことである。にもかかわらず、水は不可欠なものであることが間違いない。『閩都別記』に海洋要素を有する物語に基づく作者の創作は、福建の海洋文化を反映していたものであると考えられる。筆者はこれまで『閩都別記』を研究の対象としてきたが、謎だらけの『閩都別記』の研究が九牛の一毛を論じたに過ぎないという不満を感じ、一層の努力の必要性を痛感している次第である。

最後に、何分にも中国古典文学を研究する初心者であるため、書いたの不適切などところがあるかもしれない、諸々の至らない点をご寛容くださるようお願いする次第である。

参考文献

1、古書籍類

宋・趙汝適	『諸蕃志』
宋・祝穆	『方輿勝覽』
宋・歐陽修、宋祁	『新唐書』
宋・梁克家	『淳熙三山志』
明・陳子龍	『明經世文編』
明・何喬遠	『閩書』
明・黃仲昭	『八閩通志』
明・王應山	『閩都記』
明・釋忠誥	『全室外集』
明・謝肇淛	『五雜俎』
明・謝肇淛	『長溪瑣語』
明・馮夢龍	『警世通言』
明・馮夢龍	『醒世恆言』
明・鄭若增	『籌海圖編』
清	『明史』
清・吳仁臣	『十國春秋』
清・朱景行、鄭祖庚	『閩縣鄉土志』
清・郭柏蒼	『竹間十日話』
清・蒲松齡	『聊齋志異』
清・陳盛韶	『問俗錄』
清・李拔	『福州府志』
清・顧炎武	『天下郡國利病書』
清・施洪保	『閩雜記』
清・陳侃	『使琉球錄』
清・周煌	『琉球國志略』

- | | |
|-------------------|-----------|
| 清・徐葆光 | 『中山傳信錄卷六』 |
| 琉球・蔡温 | 『球陽記事』 |
| 民国・石有紀 張琴 | 『民國莆田縣誌』 |
| N, Spataru Milesu | 『中國漫記』 |

2、現代書籍

- 窪徳忠『中国文化と南島 南島文化叢書 1』第一書房, 1981 年。
- 吉野裕子『山の神』人文書院 1989 年
- 梅木哲人『中国福建省・琉球列島交渉史の研究』『福州柔遠駅と琉球・中国関係』第一書房, 1994 年。
- 野村伸一『東シナ海文化圏』講談社, 2012 年。
- 中砂明德『中国近世の福建人—士大夫と出版人』名古屋大学出版会, 2012 年。
- 油印本『福建文學史』福建師範學院中國語言文學系, 1959 年,
- 『福建風物志』福建人民出版社, 1985 年。
- 『中国民間故事集成・福建卷・福州分卷』福州市民間文學集成委員會, 1990 年。
- 『中國地方誌集成・安海志』上海書店, 1992 年
- 傅樂淑 中西关系史料编年 (1644-1820 年), 1994 年
- 朱一玄、寧稼雨、陳桂聲『中國古代小說總目提要』人民文學出版社, 2005 年
- 徐傑主編『『閩都別記』與閩都文化研究文集』海峽文芸出版社, 2011 年。
- 鬱永河『海上紀略』『中國海疆文獻續編・海運交通卷二』線裝書局, 2012 年
- 孔凡禮點校『蘇軾文集』中華書局, 1986 年。

その他

- Peter Y Ng『新平之地：香港地區漢文地名指南』香港大學出版社, 1983 年。
- Susan Naquin 陳仲丹翻譯『十八世紀中國社會』江蘇人民出版社, 2008 年。
- W. エバーハルト著 君島久子翻譯『古代中国の地方文化』六興出版, 1987 年。

3、参考論文

- 徐曉望「論宋代福建經濟文化的歷史地位」東南學術, 2002 年 02 期。
- 李瑾明「南宋时期福建经济的地域性与米谷供求情况」中國社會經濟史研究, 2005 年 4 期。
- 陳存洗「福州劉華墓出土的孔雀藍釉瓶的來源問題」海交史研究 1985 年
- 吴文良、吴幼雄『泉州宗教石刻』科学出版社, 2005 年
- 黃萍瑛「臺灣民間信仰孤娘的奉祀 一個臺灣社會史的考察」國立中央大學碩士論文 2000 年
- 徐曉望「福建民間信仰源流」『福建民間信仰論集』光明日報出版社, 2013 年。

宋馥香「閩越族蛇信仰與意象解析」閩江學院學報, 2008 年 1 期。

楊式熔、王枝忠「『閩都別記』民間故事類型考析」福州大學學報(哲學社會科學版), 2007 年 4 期。

黃向春「地方史、地方文人與地方性知識的互動以《閩都別記》為例」廣西民族學院學報(哲學社會科學版) 2006 年 4 月

鄒劍萍「《閩都別記》中的海洋敘事及文化價值」集美大學學報(哲學社會科學版) 2015 年 03 期

王枝忠「論《閩都別記》作者的傳統文化修養《閩都別記》作者叢測之一」廈門教育學院學報 2007 年 03 期

王子成「『三言』の研究－小説から見る水神信仰」言語と文化論集 2016 年 2 月 22 號